

|      |                                |
|------|--------------------------------|
| タイトル | 人文学部との旅路 - 内面的変遷のこぼれ話          |
| 著者   | テレングト, アイトル; Terenguto, Aitoru |
| 引用   | 北海学園大学人文論集(78): 7-33           |
| 発行日  | 2025-03-31                     |



テレングト・アイトル教授



## 人文学部との旅路 ― 内面的変遷のこぼれ話

テレングト・アイトル 2025.2.20

初めて札幌とその周辺の自然に触れたのは、1992年8月。団体通訳の仕事で訪れた旅行がきっかけだった。東京の暑さに弱い私にとって、札幌はまるで避暑地のように感じられ、藻岩山の腹中の旭山記念公園から眺める風景はとても新鮮だった。あのときを境に、札幌という街は私のなかで憧れの場所となった。また、内面でとくに印象的だったのは、羊ヶ丘に立つクラーク博士像の台座に刻まれている「BOYS BE AMBITIOUS」（少年よ、大志を抱け）という、明治時代を象徴するフレーズである（後になって博士像の指差す方向を調べたところ、奇しくもそれは北海道大学や北海学園大学がある方角を指差していることがわかった。しかも、クラーク博士の教育理念のもとで、内村鑑三や新渡戸稲造らが巣立ったらしい）。

二度目に札幌へ来たのは、実際にこの憧れの街で暮らすためだった。1998年、学校法人北海学園との縁ができ、翌年、人文学部に所属するようになる。そこから約27年間、北海学園大学人文学部を拠点として、教育・研究・校務に携わる日々を送ってきた。こうして札幌は、単なる避暑の思い出から、私の学びと成長を支える拠点へと変化していったのだ。

最初の頃、私は自分自身をまったく勝手の分からない「異邦人」と定義していた。実際、私のような「異邦人」が日本文化学科で教壇に立つことは、当時の日本の大学では極めて珍しかっただろう。私自身も含め、周囲の人々も「テレングト・アイトル」という存在をどう位置づければよいのか、内心逡巡していたに違いない。それは私が簡単に外国人やモンゴル人、中国人、外人、異邦人、比較文学研究者、さらには「宇宙人」遊牧民の末裔、文化的ノマドなど、どのカテゴリーにも合致しそうででありながら、どれにも収まらないという曖昧な立場にいたからだ。比喩的に言えば、19

世紀の植民地インド人が大英帝国の大学でシェイクスピアを教えるのに匹敵するといっても、大げさとは言えまい。

ところが、現実はその悲観的なものではなかった。本学人文学部はちょうど草創期から助走期へと移る段階で、私はすぐに教員仲間や事務の方々のチームメンバーに組み込まれ、講義の最前線を走る一員として迎え入れられた。そして、人文学部創立者の菱川義夫先生（近代文学）、千葉宣一先生（比較文学）、永井秀夫先生（日本近代史）、村山出先生（日本古典）らが語る日本文化学科の未来図を聞くうちに、それが決して私と無縁のものではないと強く感じたことを覚えている。というのも、19～20世紀にかけての東西の近代化のプロセスを考えると、戦前、「蒙疆自治聯合政府」の日本留学予備校で父が日本語を学び、それを引き継いで学問の道を選んだ私にとって「元宗主国」であった「大日本帝国」で夢を実現することは、ある意味自然の流れだったからである。

実際、戦前の「大日本帝国」がモンゴル地域に派遣した教師の中に、アメリカのクラーク博士のような著名な人物こそいなかったものの、「BOYS, BE AMBITIOUS（少年よ、大志を抱け）」の精神に共鳴し、同様なところざしを持ってモンゴルで、「少年よ、諸君はチングス・ハーンの末裔なのだ。大志を抱け！」と激励しなかった教師はいなかったはずである（事実、その「大志」は今日のモンゴル国教育においても最も根幹的なものだが）。父の世代は、そういった呼び掛けに激励された少年たちで、やがてみんな歴史の荒波に翻弄されることになるが、しかし、その後を受け継ぎ、戦後の現代日本で学び続けた私にとって、「異邦人」というよりも、むしろ内面において深くにまで溶け込んだ、ごく自然な成り行きだったのかもしれない。とりわけ、自分の研究範囲にかかわる「異邦人」——たとえば小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）と比べれば、自分が「異邦人」を名乗るのはなんと幼稚で未熟なことか、とも思わされた。

特に感謝しているのは、最初の二、三年間、試練ともいべき日々のなかで、日本古典以外の日本文学、比較文学（東西詩学の比較をも含む）、文学理論に関する多くの講義を担当させてもらったことだ。当時の授業内容

の多くは、今では記憶の彼方へ消えかかっているが、しかし不思議なことに、鮮明に思い出すのは、先生方と夜に飲みに出かけたときの光景だ。互いに張り詰めた空気のなか、杯を傾けながら笑い声と衝突すれすれの真剣な議論が交錯し、尽きることなく日本文化・文学のエッセンスについて語り合ったこと。それは、何にも代えがたい貴重な時間だった。

自分がいったい「異邦人」なのか「帝国の遺産」なのか曖昧なまま、教育・研究・校務に励んでいるうち、人文学部の創設時の先生方は定年退職などで去り、日本は図らずもグローバリゼーションの波に巻き込まれる世紀の転換期を迎える。エドワード・サイードの『オリエンタリズム』のような思想も人文学全般に浸透し、帝国と植民地、中心と周辺を再考する時代が訪れる。比較文学を専門とする私も、東洋の周辺に属するのか、それとも「西洋列強」の周辺に属するのか、あるいは相対主義的な立ち位置をとるか、自分の文化的な所在などを内面で問われることとなる。私は「オリエンタリズム」にある程度の賛同を覚えつつも、あれは所詮欧米の伝統的視点への自己批判的な一側面に過ぎないのではないか、と捉えていた。ただ、多くの思想や理論の中で、とりわけ、唯物論的なイデオロギーには、内面でどうしてもアレルギーのような拒絶感を覚えてしまう。それは、人文学を自分の思考の基盤に据えているからなのかもしれない。そして、研究の都合で北米や台湾を行き来する必要性から、2002年に日本国籍を取得し、台湾や英米、ユーラシア大陸の両側を調査・学会で飛び回るようになる。そして、人文学部は、拠点よりもホームのような存在となり、出かけては戻る。とりわけ出かけて戻るときに、比喩的に言えば、『聖書』の言う「放蕩息子の帰還」のような心持ちになる。そのホームのように迎えてくれたのは、当学部と同僚や職員だけでなく、欧米や中国とは異なる日本特有の静けさと和やかな雰囲気でもあった。そうした空気に包まれると、ええと言われぬ帰郷したような居心地の良さを覚える。

2005年、人文学部は発展し、もともとの大学院文学研究科日本文化専攻博士課程に加えて英米文化専攻博士課程も設置され、いわば二輪馬車のような体制へと移行した。さらに2012年の創立20周年を機に、両学科と専

攻の学問的な相互参照性はより強まっていった。従って、いつの間にか、人文学部の中で私は、本当の「異邦人」なのだと自覚させられ、気がつけば両学科の狭間に立たされているような感覚であった。

実際、私にとって日本文化学科と英米文化学科は、まるで東洋と西洋を組み合わせ一つの比較文学比較文化学部を構成したような場所である。特に2005年から2015年にかけては、大濱徹也先生の日本史と安酸敏眞先生のドイツキリスト教精神史(いずれも日本人のアイデンティティや信仰、さらには精神的な探求においてウチへと、もしくはソトへと深く探究する領分)との絶妙なバランスによって、人文学部全体が振り子の原理で動いていたように思えた。両先生の研究軌跡、そして両学科と専攻が目指すところは、比較文学のパースペクティブにおいて見れば、日本の根源にある信仰・信念のあり方に触れ、それをさまざまな言語とツールを通して探る思考の旅のようにも見える。つまり、さまざまな言語とコードを通じて、おのずから一なるものから多様へと拡散し、引き裂かれながらもまた回帰しようとする思考の動きがそこにはあった(このあたりは、研究分野や視点の違いで解釈は変わるかもしれない)。

ちょうどこの時期、学部と同僚の支援を受けて、私はサバティカルのため二度にわたってケンブリッジ大学で研究滞在をした。クレアホール・カレッジを拠点に、さまざまな分野の研究者と勉強会やディスカッションを重ねるなかで、ときには気が遠くなるほど深遠な議論にも触れる機会を得た。とりわけ、私が日本国籍者でありながら、モンゴル人・中国人・東洋人でもあり、多様なアイデンティティと複数の言語を持って、学問の起源や言語・文学を問いかけ、自分の言語と思考のギアを変えるごとに、あらためて自分が彷徨える「異邦人」であることを痛感させられる。

しかしやがて分かったのは、西洋古典学や哲学、神学の研究者たちもまた、ギリシャ・ローマという「帝国の遺産」に属しながら、アテネやローマにとっては皆「異邦人」だったという事実である。しかも彼らがいずれも複数の言語と文化を背景にし、帰依する精神的支柱はギリシャ神話と『聖書』の二大源流になるのだが、これらはいずれも究極的に言語・発話・文

字・記憶の問題群へと直結するのである。そしてそれを探究しようとする研究者たちは、みんなある意味「異邦人」の軌跡を辿っているのだ。偶然ではあるが、現代におけるこれらの問題群は、私の拠点となるクレアホール・カレッジから約 2000 メートル近くの墓地に眠るワイトゲンシュタイン（前期の哲学）によっても提起されていた。しかし、未解決のままであり、多くの人々には気づかれない「グレーゾーン」となっているのである。

ひるがえって日本に目を移せば、これらの問題はギリシャ神話と同様に、日本神話、そして文学や文化的アイデンティティに深く関わり、特に日本神話の時代から記紀万葉以前の能記（シニフィアン）と所記（シニフェエ）の言語表現に直結する問題になる。比較文学の芳賀徹先生が柳田國男の調査を参照して指摘したことがあるが、かつて神々にまつわる物語において天地が創造され、生命が誕生した「原郷」あるいは「異郷」があったはずで、それは大陸ではなく、「日本人の歴史の記憶の一番奥深いところに海があるはず」、「自分たちのはるかな原郷というか、もとの故郷との結びつきを予感して生まれてきた」（『海と文明』東京大学出版会、1987）のだという。つまり、記紀万葉の千年前の記憶、延々と続いた神話がのちの漢文の記録を通じて千年単位で民族の記憶には断絶か変容が起こったことを想起する必要があると示唆する。そういった起源において漢文記録による千年単位での断絶と変容は、言うなれば、「ホメロス問題」（英雄叙事詩は誰が語り、また誰がどのように書いたのかなど）にも通じる起源への憧憬・回帰の問題だ。これはプラトンと同様に「原郷」あるいは「異郷」を想起（アナムネシス）しようと呼びかけてもいるのだといえる。

2015 年、本学大学案内の「学問は楽しい」というコラムで、私は比較文学の複眼的思考について言及し、原初の「原郷」か「異郷」への最初の探究者の思考も「異邦人」的な立ち位置であったことを示唆して、こう書いたことがある。

複眼的思考は何も比較文学という分野だけのベクトルではありません。日本の起源になる記紀万葉の記述や、日本語自体の獲得・習得の

過程において、日本はすでに複眼的に物事を認知するようになったことがわかります。例えば、初めは「神」(Shen, 呪術師)という中国の漢字を書いて「じん」と読み、つぎに大和ことばでは、それを「かみ」といい、また「アマテラスオオミカミ」と翻訳されました。そこで漢字の象形・音声・意味がやまとのことばの音声・意味と合体されたが、その両方によって一つに合わさったことそれ自体は、いわゆる「神」という複合的なことが意味されるようになります。しかし、この初めの一瞬の時点（決して歴史的積み重ねによるものではない）から、日本語の「神」は漢字（Shen, 呪術師）とはすでに差異を持つことになり、また大和ことばの「かみ」の元の意味も漢字によって変容しています。いうなれば、この時点で、「神」は「じん」「しん」であり、「Shen, 呪術師」であり、また「かみ」「かみがみ」でもあります。しかしながら、その時点でまだどれでもなく、新たに創出され、改めて認知された集合の「神」でもあります。「神」という漢字を獲得して、日本語として認知し、習得して、読んで、書いて、表現するという、このプロセスその一連の起源的な行為の結果それ自体には、すでに複眼的な思考が含意されていると言えます。つまり「神」(Shen, 呪術師, じん, しん, かみ, かみがみ)とは、複数の意味と、複数の文化コンテキストを瞬時に目配って、合わさって認知するという複眼的な思考の結果だと言えます。実際、日本語ないし日本文化は、元来そういった複合的、複眼的な思考によって生成されてきたのだと言えるのではないのでしょうか。

実際、最初に漢字「神」に出会い、漢字記号によって自分の「かみ」か「かみがみ」を表現しようとした先人達は、まさしくまず「原郷」を離れ、他者・「異郷」のプラットホームで「異邦人」としてさまよい、「原郷」と「異郷」の間で記号・言葉の記述の方法を発明し、それを習得して往来する「異邦人」そのものだったと言える。そして、「異郷」をさまよいながら、「原郷」の英雄叙事詩を語るホメロスのように「神話」を表現しようとした

のではなかったのだろうか。そう考えると、漢字とその組み合わせによって語るという行為それ自体は、すでに「異邦人」的な行為であり、彷徨える「異邦人」は、つねに語られざる何かが存在することを示そうと、あるいは表象しようとしたのである。それ故か、中国の漢字解釈を凌ぐ勢いで探究した大槻文彦、諸橋轍次、白川静といった多くの和漢学者や仏教者たちは、和語と漢字、そして仏典のあいだを直向きに「異邦人」的な思考で探求し、彷徨い、探究を続けてきたのだ。そうした彼らの一途の心的な旅路には、誰もが深く共感を覚えるに違いない。

こうして文化の根源や源泉、言語や信仰とのコミュニケーションや葛藤を考えてみると、当人文学部の両学科と各専門の先輩や同僚も、意識的か無意識的かはともかく、それぞれの分野で「異邦人」として旅を続けていることに気づかされる。

近年、教育現場だけでなくあらゆる文化的・社会的現象に対して批判的思考（クリティカル・シンキング）が推奨されるようになってきた。だが、人文学研究者にとってはそれだけでは不十分である。日本文化を深く理解するには、一度内面的に日本を離れ、外から見直す「異邦人」的な立ち位置や客観的視点が必要だし、欧米文化を理解する上でも同様の「異邦人」的な視点をとり、偏らずに洞察するのが自然で必須なことである。しかし、真に重要なのは、その「異邦人」的かつ客観的なアプローチを自分の内面に取り込み、自分自身をも「異邦人」的に省察する——いわば「内的な異邦性」あるいは「異邦人」的な内的な省察（reflective thinking）を深めることだ。そうでなければ、他者に批判的でありながらナルシズムに溺れるだけの幼稚な研究者にとどまってしまうだろう。

実際、当人文学部では、単なる批判的思考（クリティカル・シンキング）の実践にとどまらず、内的な異邦性か内面的な省察も活発に行われている場面が見受けられ、強く共感を覚え、それに私も深く没入してしまうのだ。そして、それが自ずとオーケストラのように文化探究のハーモニーとポリフォニーの共鳴を生み出しているようである。こうした環境のなかで、私のような「異邦人」も自然に一員となり、いまやオーケストラの一演奏者

として所定のポジションで所定の演目を奏でている。

しかし、もしある日、私がこの「異邦人」的な内省的・省察的なアプローチを放棄し、単なる自己愛に浸る批判的思考（クリティカル・シンキング）しか持たなくなれば、当然ながら思想的にも社会的にも、また学問の立ち位置的にも批判されるべきで、文化探究のオーケストラのメンバーから降板されるべきだろう。したがって、プラトンの言葉を借りるならば、それはまさに「われわれの都市（国家）から追放されるべき理由があったもの」（『国家』607b）に他ならない、というわけだ。

そして今、AIが急速に発展する時代を迎え、「人間だけが意識をもつか、それとも他の存在にも意識がありうるのか」という問いが世界規模で注目を集めるようになってきた。それに伴い、人文学も、より包括的で学際的な視野を求められる段階に入ったと感じる。そう考えると、33年前に羊ヶ丘で私に強い印象を与えたクラーク博士像の台座にある「BOYS BE AMBITIOUS」（少年よ、大志を抱け）という象徴的な言葉は、いまや「KNOW THYSELF」（汝、自分自身を知れ）（『プロタゴラス』343b）という普遍的な精神のフレーズを付け加えて考えるべき時期に来ているのかもしれない——私は内心、つくづくそう思う。

この27年間、北海学園大学で過ごした日々は、私にとってかけがえのない精神的財産となりました。ここに心からの感謝を捧げます。

## 履 歴

テレングト アイトル (Telengut Aikhatar / 艾特)

1956 年 4 月 24 日 生まれ

## 学 歴

1979 年 9 月 内モンゴル大学外国語学部日本言語文学専攻

1982 年 9 月 東北師範大学日本文学専攻 (転学)

1983 年 7 月 内モンゴル大学卒業 (文学士)

1983 年 9 月 北京語言大学日本文部省日本語講師育成センター入学

1984 年 7 月 同上 修了

1987 年 4 月 東京外国語大学大学院モンゴル語研究科研究生

1988 年 4 月 大正大学大学院文学研究科日本近代文学専攻前期入学

1990 年 3 月 同上 修了 (文学修士)

1990 年 4 月 同大学大学院日本近代文学専攻後期課程入学

1993 年 3 月 同専攻単位取得退学

1993 年 4 月 東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻博士課程  
入学

1998 年 3 月 同博士課程単位取得修了 (学術博士)

## 職 歴

1984 年 9 月 内モンゴル大学外国語学部助手

1986 年 9 月 内モンゴル大学外国語学部日本言語文学専攻 (副主任・講師)

1998 年 4 月 北海学園法人嘱託研究員

1999 年 4 月 北海学園大学人文学部日本文化学科助教授

2002 年 4 月 北海学園大学人文学部日本文化学科教授～現在に至る

2003 年 4 月 北海学園大学文学研究科教授～現在に至る

## 学内委員（主なもの）

入試委員・図書委員・『人文論集』『年報・新人文学』編集委員・中国協定校専門委員・市民公開講座委員・大学院委員会委員・教育振興会委員・研究紀要委員・学部教務委員・学部広報委員

## 所属 学会・会員

日本比較文学会、国際比較文学会、東京大学比較文学会、近代日本文学会、日本モンゴル文学会、ケンブリッジ大学（クレアホールカレッジ）終身会員

## 学 位

東京大学博士（学術）（東京大学、1998 年；学域番号 総第 117 号）

# 主 要 業 績

## 研究業績（雑録，その他も含む）

### 1. 著書（単著）

- 01 『三島文学の原型 ― 始原・根茎隠喩・構造』（学術叢書）（単）2002 年 10 月，日本図書センター，A 5 版，440 頁．ISBN：4820566199
- 02 『詩的狂気の想像力と海の系譜 ― 西洋から東洋へ、その伝播、受容と変容』（単）2016 年 9 月，現代図書，A 5 版，462 頁．ISBN：9784434218415
- 03 『増補改訂版・詩的狂気の想像力と海の系譜 ― 西洋から東洋へ、その伝播、受容と変容』（単）2022 年 3 月，Amazon/Kindle，（電子書籍）．ASIN：B09V51NK4F
- 04 『超越への親密性 ― もう一つの日本文学の読み方』（*Intimacy with Transcendence: A New Perspective on Japanese Literature*）2023 年 3 月，北海学園大学出版会，A 5 版，524 頁．ISBN：9784910236087

## 2. 著書（共編著）

- 01 テレングト・アイトル（艾特）、バイカル編著『異文化を遊牧する人たち——在日中国籍モンゴル人記念誌』（共）アクティブ、1999年12月（「序に代えて」を執筆、7-10頁）。ISBN：4901239015
- 02 松本徹、井上隆史、佐藤秀明編『三島由紀夫事典』（共）勉誠出版、2000年11月（「中国と台湾」を担当）。（673-679頁所収）ISBN：4585060189
- 03 松本徹、井上隆史、佐藤秀明編『三島由紀夫論集〈3〉世界の中の三島由紀夫』（共）勉誠出版、2001年5月（「見えざる「深層」「構造」に命じられて生死した文学——三島由紀夫文学の「根源」あるいは「原型」」を執筆、115-159頁所収）。ISBN：4585040439
- 04 大濱徹也編『東北仏教の世界——社会的機能と複合的性格』（共）友峰書店新社、2005年3月（「怨親平等と戦争とモンゴル——元兵怨霊追善供養碑をめぐる」を執筆、55-79頁所収）ISBN：487045226
- 05 国際宗教研究所編『現代宗教〈2006〉特集 慰霊と追悼』（共）東京堂出版、2006年6月（「十三世紀「蒙古襲来」と「蒙古の碑」——日本の死生観における鎮魂と怨親平等をめぐる」を執筆、185-225頁所収）。ISBN：4490306393
- 06 東京大学大学院人文社会系研究科グローバル COE 編『戦争と戦没者をめぐる死生学』（共）生活書院、2010年9月（「敵味方が乗り越えられるか——13世紀「蒙古の碑」の日本の死生観をめぐる」を執筆、11-25頁所収）。ISBN：9784925210331
- 07 イルメラ・日地谷・キルシュネライト編『MISHIMA！——三島由紀夫の知的ルーツと国際的インパクト』（共）昭和堂、2010年12月（「アジアにおける三島文学——自決後40周年によせて」を執筆、153-175頁所収）。ISBN：481221064X；ISBN：9784812210642
- 08 王志松・島村輝ほか編『日本近現代文学研究』（日本学研究叢書）（共）中国北京外国語教学与研究出版社、2014年7月（「作家研究・三島由紀夫（1925-1970）」を担当、417-430頁所収）。ISBN：9787513549738

- 09 稲賀繁美編『海賊史観からみた世界史の再構築 ― 交易と情報流通の現在を問い直す』(共) 思文閣出版, 2017 年 2 月(「修辞学における西洋と日本と中国 ― その受容と変容をめぐる」を執筆. 583-619 頁所収). ISBN : 9784784218813
- 10 芝山豊, テレングト・アイトルほか編著『モンゴル文学』(特集号・第 3 号) 日本モンゴル文学会, 2018 年 3 月(〈中国語〉「论赛春嘎(纳・赛音超克图)文学的创作抑或原型: 初期作品的浪漫主义和“启蒙主义”以及蒙古传统文学」を執筆. 214-258 頁所収) ISBN : 9784991025709
- 11 稲賀繁美編『映しと移ろい ― 文化伝播の器と蝕変の実相』(共) 花鳥社, 2019 年 9 月(「文学における境界(あいだ)と詩的狂気」を執筆. 282-299 頁所収) ISBN : 9784909832122
- 12 テレングト・アイトル, 岡田和行『ローカルな材源と公共的知識』(Amazon/Kindle, 電子書籍)(共編訳) 2022 年 9 月. ASIN : BOGBXMXM5

### 3. 著書 (共編著: 中国語・英語・モンゴル語〈キリル文字を含む〉)

- 13 テレングト・アイトル (艾特), 中里豊子編著訳『イタリア歌曲集』凡人社, 1997 年 10 月(「前言」・中国語とモンゴル語). ISBN : 4893583883
- 14 B. 宝音贺希格编著『天之風』(共) 2001 年. 北京民族出版社(「序に代えて」(モンゴル語) 1-15 頁を執筆). ISBN : 7105037687
- 15 王曉平編『東亜詩学与文化互読 ― 川本皓嗣古稀記念論文集』(共)(中国語) 中華書局, 2009 年 10 月(「13 世紀“蒙古襲来”和“蒙古碑” ― 关于日本生死观中的镇魂和怨亲平等」を執筆・共訳. 206-228 頁所収). ISBN : 9787101069310
- 16 ドロンテンゲル, テレングト・アイトル他編著『ᠮᠣᠩᠭᠣᠯ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ (蒙古文学学科史: 梳理和阐释)』ᠮᠣᠩᠭᠣᠯ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ (内蒙古文化出版社), 2020 年 12 月(〈中国語〉「非亚里士多德诗学思想与蒙古族英雄史诗研究序论(上)」

- を執筆. 62-85 頁所収). ISBN : 9787552119466
- 17 Б.Мөнхбаяр. Редактор, Монголын уран зохиолын харилцаа, холбоо: уламжлал, өнөө *in* Улаанбаатар 2023 (ムンヘバヤル編『多様な関係におけるモンゴル文学の伝統と現在 in 2023 ウランバートル』(共) UB・Jacom Press, 2023 年 12 月 (“Concerning Poetic Creativity Between Imagination Allegory: Attempt an Allegorical Interpretation of Coleridge’s “Kubla Khan”, pp.32-53. 所収). ISBN : 9789919017224
- 18 Б.Мөнхбаяр. Редактор, МОНГОЛ ТУУРГАТНЫ УРАН ЗОХИОЛ, СОЁЛЫН ӨВ, УЛАМЖЛАЛ, ШИНЭЧЛЭЛ: НА. САЙЧУНГА /На. САЙНЦОГТJ-110 (『モンゴル系諸民族の文学と文化の遺産・伝統・革新——ナ・サインチョクト (サイチンガ) 生誕 110 周年』 Нандир (ナンディル出版社) 2024 年 9 月 (САЙЧУНГАГИЙН УРАН ЗОХИОЛЫН ТУУРВИЛ ЗҮЙН ЭХ БУЛАГ, УУР АМЬСГАЛ: Эхэн үеийн бүтээл дэх Романтизм, Соён гэгээрүүлэх үзэл ба Монгол уламжлалт уран зохиолын тухай. (サイチンガ文学の源泉及びアーキタイプ——初期のロマン主義・啓蒙主義と伝統について) pp. 47-100. 所収). ISBN : 9789919907938

#### 4. 学術論文 (日本語)

- 01 「三島文学の場所——『仮面の告白』を中心に」(単) 1991 年 3 月 大正大学大学出版部『大正大学大学院研究論集』第 15 号, 173-182 頁.
- 02 「三島由紀夫の小説の形式」(単) 1991 年 7 月 大正大学国文学会『国文学踏査』第 16 号, 65-88 頁.
- 03 「三島文学の根底にある精神構造の正体へのアプローチ——『仮面の告白』を中心に」中国社会科学研究会『東瀛求索・中国社会科学研究論文集』第 4 号, 1991 年 11 月, 103-118 頁.
- 04 「海・太陽への問いと諦め——森鷗外の『妄想』を巡って」(単) 1994 年 10 月東京大学総合文化研究科『比較文学・文化論集』第 10 号,

26-37 頁.

- 05 「パロディと自己パロディの構造——『吾輩は猫である』を中心に」  
(単) 1996 年 4 月東京大学『比較文学研究』第 68 号, 33-53 頁.
- 06 「サインバイノー? 〈ホールヒ・アミタン〉——モンゴル人の世界観  
へのアプローチ」(単) 1999 年 8 月 NIRA (Nippon Institute for  
Research Advancement) 総合研究開発『NIRA 政策研究』第 12 卷  
第 8 号, 54-59 頁.
- 07 「言語をさすらう越境者の雫——中国内モンゴルの現代語集『天の風』  
を中心に」(単) 2000 年 7 月北海学園大学人文学会『人文論集』第 16  
号, 31-46 頁.
- 08 「三島由紀夫文学の原型——プリミティヴの現象とその構造及び根  
茎隠喩(「酸模」から『仮面の告白』まで)〈序説・第一章プリミティ  
ヴ——構造と根茎隠喩〉(1)」(単) 2000 年 7 月北海学園大学『学園  
論集』第 104 号, 17-85 頁.
- 09 「三島由紀夫文学の原型——プリミティヴの現象とその構造及び根  
茎隠喩(「酸模」から『仮面の告白』まで)〈第二章検証——形成の  
過程〉(2)」(単) 2000 年 9 月北海学園大学『学園論集』第 105 号,  
1-35 頁.
- 10 「三島由紀夫文学の原型——プリミティヴの現象とその構造及び根  
茎隠喩(「酸模」から『仮面の告白』まで)〈定着——構成・構造の  
戯れ〉(3)」(単) 2000 年 12 月北海学園大学『学園論集』第 106 号,  
1-43 頁.
- 11 「三島由紀夫文学の原型——プリミティヴの現象とその構造及び根  
茎隠喩(「酸模」から『仮面の告白』まで)〈第四章・完結——変奏  
と予兆〉(4・上)」(単) 2001 年 3 月北海学園大学『学園論集』第 107  
号, 1-31 頁.
- 12 「モンゴル人の世界観あるいは自然観について——心的状況への解  
釈学的なアプローチ」(単) 2001 年 4 月, 日本砂漠学会誌『砂漠研  
究』第 11 巻第 1 号, 35-44 頁.

- 13 「三島由紀夫文学の原型 — プリミティヴの現象とその構造及び根茎隠喩（「酸模」から『仮面の告白』まで）〈第四章・完結 — 変奏と予兆〉（４・中）」（単）2001年6月北海学園大学『学園論集』第108号, 1-32頁.
- 14 「三島由紀夫文学の原型 — プリミティヴの現象とその構造及び根茎隠喩（「酸模」から『仮面の告白』まで）〈第四章・完結 — 変奏と予兆〉（４・中・続）」（単）2001年9月北海学園大学『学園論集』第109号, 1-14頁.
- 15 「中国内モンゴル自治区エヴェンキ族自治旗イミン地域のエコロジーと伝統文化の変容について（1）（共著）2001年9月『学園論集』第109号, 59-69頁.
- 16 「三島由紀夫文学の原型 — プリミティヴの現象とその構造及び根茎隠喩（「酸模」から『仮面の告白』まで）〈第四章・完結 — 変奏と予兆〉（４・下）」（単）2001年12月北海学園大学『学園論集』第110号, 17-30頁.
- 17 「発見的装置 — 『海と毒薬』の寓意と象徴について（上）」（単）2003年3月北海学園大学人文学会『人文論集』第23・24合併号, 79-103頁.
- 18 「発見的装置 — 『海と毒薬』の寓意と象徴について（下）」（単）2003年10月北海学園大学人文学会『人文論集』第25号, 1-16頁.
- 19 「近代の衝撃と海 — 鷗外・漱石・魯迅・郁達夫・サイチヨンガによって表象された「海」（上）」（単）2004年7月北海学園大学人文学会『人文論集』第28号, 47~66頁.
- 20 「近代の衝撃と海 — 鷗外・漱石・魯迅・郁達夫・サイチヨンガによって表象された「海」 — （中）」（単）2004年11月北海学園大学人文学会『人文論集』第29号, 81~98頁.
- 21 「境界を生きる新人文主義」（単）2005年3月. 北海道人文学会大会シンポジウム『年報・新人文』第1号, 170-178頁.
- 22 「戦争と鎮魂 — 元軍戦死者怨霊追善碑をめぐる（上）」（単）2005

- 年 7 月北海学園大学人文学会『人文論集』第 31 号, 1~20 頁.
- 23 「戦争と鎮魂 — 元軍戦死者怨霊追善碑をめぐる(下)」(単) 2005 年 11 月北海学園大学人文学会『人文論集』第 32 号, 81~103 頁.
- 24 「近代の衝撃と海 — 鷗外・漱石・魯迅・郁達夫・サイチヨンガによって表象された「海」— (中一続)」(単) 2008 年 3 月北海学園大学人文学会『人文論集』第 38 号, 31-49 頁.
- 25 「近代の衝撃と海 — 鷗外・漱石・魯迅・郁達夫・サイチヨンガによって表象された「海」— (中一続 I)」(単) 2008 年 7 月北海学園大学人文学会『人文論集』第 40 号, 59-80 頁.
- 26 「近代の衝撃と海 — 鷗外・漱石・魯迅・郁達夫・サイチヨンガによって表象された『海』(中一続 II)」(単) 2009 年 7 月北海学園大学人文学会『人文論集』第 43 号, 81-112 頁.
- 27 「概念としての文学 — 起源における東西詩学の伝統の相違をめぐる(下)」(単) 2009 年 12 月北海学園大学大学院人文学研究科『年報・新人文』第 6 号, 42-131 頁.
- 28 「アジアにおける三島文学 — 自決後 40 周年によせて」(単) 2010 年 3 月北海学園大学人文学会『人文論集』第 45 号, 67-86 頁.
- 29 「三島文学のグローバル化 — あるいはその研究と展望」(単) 2012 年 3 月北海学園大学人文学会『人文論集』第 51 号, 61-74 頁.
- 30 「東洋における修辞学の変遷 — 日中修辞学の比較を兼ねて」(単) 2013 年 3 月北海学園大学人文学会『人文論集』第 54 号, 61-82 頁.
- 31 「想像力の再発見と海 — 西から東への伝播と変容」(単) 2014 年 3 月北海学園大学人文学会『人文論集』第 56 号, 1-37 頁.
- 32 「近代の衝撃と海 — 鷗外・漱石・魯迅・郁達夫・サイチンガによって表象された「海」(下)」(単) 2014 年 8 月北海学園大学人文学会『人文論集』第 57 号, 1-44 頁.

## 5. 学術論文 (英語)

- 33 “Relationship Between Man and Nature: A Hermeneutical Approach

- to Interpreting the Affective Thinking of the Mongolian People” (単)  
2004. Mongolia and Inner Asia Studies Unit, University of  
Cambridge. *Inner Asia*, (ケンブリッジ大学) Vol.6, No.1, pp. 81-93.
- 34 “Beyond Enemy and Friend? A Multiple of Views of Life and Death  
Centering on the ‘Mongolian Gravestone’” (単) 2007. Mongolia and  
Inner Asia Studies Unit, University of Cambridge. *Inner Asia*, (ケン  
ブリッジ大学) Vol.9, No.1, pp. 77-95.
- 35 “Concerning Poetic Creativity between Imagination and Allegory:  
Attempt at an Allegorical Interpretation of Coleridge’s ‘Kubla  
Khan.’” (単) *Journal of East-West Thought*, (アメリカ合衆国) Vol.  
14, No.3, Sept. 2024, pp. 1-15. (査読を経て特別再掲載)
- 36 “Poetical Madness and Mimesis: Originality in Western and  
Mongolian Epics” (単) Dec. 2024. International Association for  
Mongol Studies. *Proceedings the 12<sup>th</sup> International Congress of  
Mongolists: “Pax Mongolica and Historical Experience”, Section II  
Current Situation and Historical Development of Mongolian  
Languages and Literature*, Vol.2, pp. 496-503.

## 6. 学術論文 (中国語)

- 37 “谈中学与大学日语教学的衔接” (単) 1987 年 4 月 内蒙古大学《高  
等教育研究》第 1 期 総第 8 期, 75-77 頁.
- 38 “多重複合の文学鏡像：重新發見納・賽音超克图” (単) 2014 年 7 月  
草原文化保护发展基金《传承》总 38 期第 3 期, 62-71 頁.
- 39 “修辞学在东方的盛衰变迁：兼中日修辞学比较” (単) 2014 年 9 月  
韓国修辞学会《韓国修辞学研究》(*Korean Journal of Rhetoric*) (韓  
国) 第 21 号, 5-25 頁.

## 7. 学術論文 (モンゴル語ローマ字表記 〈キリル文字を含む〉)

- 40 “Na. sayinčuytu-yin uran jokiyal tuvurbil-un eki surbulji-yi takin

- ileregülkü ni” (「ナ・サイチョクトの創作原理の再発見」) (単)《Altan tülkigür》『金の鍵』2014.5. 18-33 頁
- 41 “Mongγulčud-un yirtinčü-yin üjelte ba bayıvalı-yin üjelte-yin tuqai — appwrtus-tu kigsen tayilburi uqavan-u tayilumji” (「モンゴル人の世界観と自然観 — エフェク的な解釈をめぐって」) (単)《Dumdadu ulus-un mongγul sudulul》(nemelte sedgöl) (『中国モンゴル学』増刊号) 第42巻, 総256号, 第6集, 2014年11月. 1-13 頁
- 42 “Udq-a jokiyal-du dürsülegdegsen dalai buyu Wang güw-wi Lü siyün Iüi da-fü nar-un silüglig keyirke” (「文学的想像力における王国維・魯迅・郁達夫らの詩的狂気」) (単)《Ulaγanqada-yin degedü surγavuli-yin Erdem sinjilegen-ü sedgöl》(『赤峰学院学报』) 第42巻, 総170号, 第4集, 2022年8月. 36-43 頁
- 43 “Udq-a jokiyal-du dürsülegdegsen dalai buyu Wang güw-wi Lü siyün Iüi da-fü nar-un silüglig keirke” (「文学的想像力における王国維・魯迅・郁達夫らの詩的狂気」) (単)《Ulaγanqada-yin degedü surγavuli-yin Erdem sinjilegen-ü sedgöl》(『赤峰学院学报』) 第43巻, 総171号, 第5集, 2022年10月. 45-54 頁
- 44 “Nayiravuly-a jüi-yin ularil qubiral: Dumdadu Yapon-u nayiravuly-a jüi-yin jüsiyen deger-e” (「修辞学の変遷 — 日本と中国の修辞学を巡って」) (単)《Öbür mungγul-un bayısi-yin yeke surγavuli, rdem sinjilegen-ü sedgöl》『内蒙古師範大学学报』(哲学社会科学蒙文版) 第50巻, 総170号, 第2集. 2021年6月. 25-37 頁
- 45 “Монголчуудын ертөнцийн үзэх үзэл ба байгалийг үзэх үзлийн тухай”. МОНГОЛ УЛС ШИНЖЛЭХ УХААНЫ АКАДЕМИ ХЭЛ ЗОХИОЛЫН ХҮРЭЭЛЭН. ХЭЛ ЗОХИОЛ СУДЛАЛ. (「モンゴル人の世界観と自然観について」) (単) モンゴル国科学アカデミー言語文学研究院『言語文学研究』第16巻, 総48号, 2023年12月. 281-298 頁

## 8. 学術論文翻訳（英語・モンゴル語から日本語へ）

- 46 ペネロペ・マレー「西洋文学批評とその古典の起源」『(*Classical Literary Criticism*, Penguin Classics, 2000)』（単）2013年8月．北海学園大学『人文論集』第55号，1-56頁．
- 47 ペネロペ・マレー「詩におけるプラトン」『(*Plato on Poetry*, Cambridge Greek and Latin Classics, 1997)』（単）2017年12月．北海学園大学文学研究科『年報・新人文学』第14号，37-92頁．
- 48 ドロンテンゲル（満全）「モンゴルの詩学——創成と構築，その基本概念と体系を巡って」（単）2019年12月．『年報・新人文学』第16号，1-27頁．
- 49 ドロンテンゲル（満全）「モンゴル文学学科史について」（単）2020年3月．北海学園大学人文学部『人文論集』第60号，227-246頁．

## 9. 書評

- 01 大濱徹也著『日本人と戦争——歴史としての戦争体験』（刀水社）「日本と日本人がどのように戦争とかわかってきたか——国民性に対して自己言及的な「析出」・「解析」を行う」（単）①『図書新聞』第2649号，2003年10月11日．5頁
- 02 大濱徹也著『日本人と戦争——歴史としての戦争体験』（刀水社）「日本と日本人がどのように戦争とかわかってきたか——国民性に対して自己言及的な「析出」・「解析」を行う」（単）②『図書新聞』第2650号，2003年10月18日．4頁
- 03 芝山豊・岡田和行編『モンゴル文学への誘い』（明石書院）（単）2003年3月『日本比較文学』第49号．157-161頁
- 04 柳瀬善治著『三島由紀夫研究——知的概観的な時代のザインとゾルレン』（創言社）（単）2010年9月『三島由紀夫研究』第11号，2011年9月．181-183頁
- 05 岩佐莊二郎著『島村抱月の文藝批評と美学理論』（早稲田大学出版部）（単）2013年5月．『比較文学』第56号．145-150頁

## 10. 学会・国際学術シンポジウム

1. 「文学的“深层结构”——用文本分析理论解读三岛文学」(単) 2002 年 9 月 11 日. 中国日本文学研究会第 8 届年会・学術研讨会(於: 中国・青島海洋大学)
2. 「三島由紀夫文学の〈深層〉」(単) 2003 年 7 月 5 日. 日本近代文学会・北海道支部例会. 北海道大学(於: 札幌・北海道大学)
3. 「境界を生きる新人文主義」(単) 2005 年 3 月. 北海道人文学会大会シンポジウム『年報・新人文』第 1 号, 170-178 頁(於: 札幌・北海学園大学)
4. 「关于日本 13 世纪元朝将士慰灵碑的调查—战争与安魂」(単) 2005 年 8 月 20 日. 中国蒙古学第 4 届国际学术研讨会(於: 中国・呼和浩特市新城宾馆)
5. 「比較文学からみる東西および日中蒙の文学の起源と日本文学の教育現場での可能性」(単) 2007 年 1 月 13 日. 国際日本文化研究センター「第 8 回日本在住外国人シンポジウム(コミュニケーションを考える)」(於: 京都・桂)
6. 「13 世紀クビライ・ハーン日本侵略と日本の死生観について」(単) 2007 年 10 月 21 日. 中国人民大学「モンゴル歴史・言語国際学術シンポジウム」(於: 北京, 中国人民大学国学院)
7. 「13 世紀仙台の「蒙古の碑」について」(単) 2007 年 10 月 28 日. 北京師範大学・日本国立民俗博物館共同主催「自然環境と民俗地理学〈日中国際シンポジウム〉」(於: 中国・北京師範大学)
8. 「敵味方は乗り越えられるか——13 世紀『蒙古の碑』の死生観をめぐって」(単) 2009 年 6 月 6 日. 東京大学グローバル COE「死生学の展開と組織化」による「戦争と戦没者をめぐる死生学」国際シンポジウム(於: 東京大学)
9. “関於十三世紀元朝侵略日本和日本仙台的”蒙古碑”(単) 2009 年 7 月 30 日. 第 16 回国際人類学世界大会(於: 中国・雲南大学)
10. 「概念としての文学——起源における東西詩学の伝統の相違をめ

- ぐって」(単) 2009 年 10 月 24 日. 中国天津市比較文学学会・天津師範大学文学院・日本国大手前大学共催「〈東亞詩学与文化互読〉国際学術研討会」(於：中国・天津師範大学)
11. “What is ‘Asian’ about Mishima’s Literature?”. (単) 2010 年 3 月 19 日. The International Conference “MISHIMA! Worldwide impact and Multi-Cultural Roots” Host: Berlin-Brandenburg Academy of Sciences and Humanities & Freie University Berlin. (於：ドイツ・ベルリン自由大学)
12. “The Early Reception of Rhetoric from the West via Japan to China” (「日中における修辞学の初期の受容について」(単) 2012 年 5 月 12 日. 東アジア文化交渉学会「第 4 回国際学術年会」(於：韓国・高麗大学)
13. 「東洋における修辞学の変遷 — 日中修辞学の比較を兼ねて」(単) 2012 年 10 月 27 日. 韓国修辞学会・中国国際修辞学会「2012 年世界中国語修辞学学会第 3 回年会兼修辞学国際学会」(於：韓国・仁川大学)
14. 「サイチンガ文学の創作原理 — 初期作品にみるロマン主義と啓蒙主義とモンゴル伝統文学の源流」(単) 2014 年 4 月 27 日. 中国人民大学国学院西域歴史言語研究所・内蒙古社会科学院文学研究所主催国際学術会議「ナ・サインチョクトと内モンゴル文化 — ナ・サインチョクト生誕 100 周年国際学術会議」(於：北京・中国人民大学)
15. 「内モンゴルの国民的詩人サイチンガ (1914-1973) — 日本留学とその文学のエッセンス」(単) 2014 年 11 月 22 日. 日本比較文学北海道支部会 (於：札幌)
16. 「バ・プリンプフの英雄叙事詩研究と非アリストテレス詩学」(単) 2019 年 6 月 23 日. 内モンゴル師範大学・日本モンゴル文学会共催国際会議「モンゴル文学ジャンル史とその整理・解釈」(於：中国フフホト・内モンゴル師範大学)
17. 「非アリストテレス詩学と『ジャンガル』詩学研究 (非亚里士多德诗

学思想与《江格尔》诗学研究) (単) 2019 年 12 月 14 日. 中国四川大学・中国比較文学会共同主催国際学術シンポジウム「新時代・新人文・新比較・新対話における学術シンポジウム」(於：中国成都市, 四川大学)

18. “Between Poetic Madness and Mimesis: Interpretation of ‘Ongon Darkhalig Shinj’ on B. Burenbukh’s Poetics of Mongolian Epic” (単) 2023 年 8 月 12 日. 「The 12th International Congress of Mongolists, “The Pax Mongolica and Historical Experience”」(於：ウランバートル市・モンゴル国立大学)
19. “The Concept of Imagination in Poetry and Literature” (単) 2023 年 8 月 15 日. 「International Conference Co-organized by National University of Mongolian and Mongolian Academy of Sciences for “Literature Relationship: Tradition and the Present”」(於：ウランバートル・モンゴル国立大学)
20. “Psyche (Ψυχή) vs. Mimesis in Literature in a Changing World: Examining the Role of Psyche in Saichinga’s Works” [Хувьсан өөрчлөгдөж буй ертөнц дэх УРАН ЗОХИОЛЫН Онгон (Онгод) VS Mimesis (дуурайхуй): Сайчунганийн уран зохиол дахь Онгон (Онгод)-ын тухай] (単) 2024 年 8 月 21 日. モンゴル国立大学・モンゴル科学アカデミー共催国際学術シンポジウム「モンゴル文化圏の文学・文化遺産と伝統——サイチンガの 110 周年にあたって」(於：ウランバートル・モンゴル国立大学)

## 11. 主な学術講演・研究会

1. 「文化の越境者」(単) 2001 年 11 月 2 日. 北海学園大学主催第 9 回市民公開講座「文化の壁を超えて」第 4 回 (於：札幌・北海学園大学内)
2. 「日本植民地満州国におけるモンゴル語新聞『フフトグ (青旗)』について」(単) 2002 年 6 月 29 日. 国際日本文化研究センター (於：

京都・桂)

3. 「遊牧と移動——モンゴル文化の諸相」(単) 2002 年 12 月 2 日. 札幌学院大学主催「異文化フォーラム」(於: 札幌・札幌学院大学 SGU ホール)
4. 「移動者(越境者)の眼」(単) 2004 年 10 月 23 日. 北海学園大学人文学部第 12 回市民公開講座第 3 回 (於: 札幌・北海学園大学)
5. 「思考様式の相違——起源における東西と日中の情緒について」(単) 2007 年 9 月 6 日. 中国内モンゴル大学創立 50 周年記念講演 (於: 中国フフホト市・内モンゴル大学)
6. 「超域文化研究の方法論——13 世紀から現在までの日本モンゴルにまつわる文化的象徴記号をめぐる」(単) 2007 年 9 月 10 日. 内モンゴル大学大学院民族学・社会学科主催講演会 (於: 中国フフホト市・内モンゴル大学)
7. 「フビライ・ハーンの日本侵略と戦後処理」(第 1 部)「東西文学および日中蒙の文学の起源における相違」(第 2 部) (単) 2007 年 10 月 29 日. 北京中央民族大学大学院講演 (於: 北京・中央民族大学)
8. 「蒙古の碑——敵味方は超えられるか」(単) 2007 年 11 月 6 日. 北海道モンゴル親善協会・第 13 回講演会 (於: 札幌・北海学園大学国際会議場)
9. 「東西における近代文学の情緒・感性・感情について——海にまつわる情緒の受容と変容」(単) 2008 年 11 月 29 日. 北海学園大学人文学部第 16 回市民公開講座第 5 回 (於: 札幌・北海学園大学内)
10. 「日本人の死生観を考える」(単) 2010 年 12 月 4 日. 明星大学日本文化学部「文化講演会」(於: 東京・明治大学日野校キャンパス)
11. 「東洋における修辞学の変遷——日中修辞学の比較を兼ねて」(単) 2013 年 1 月 26 日. 国際日本文化研究センター「21 世紀 10 年代日本文化の軌道修正——準備会第 3 回研究会」(於: 京都・桂)
12. 「グローバル化・合理化した世界における人文学——文学の役割と何か」(単) 2013 年 5 月 18 日. 北海学園大学人文学部主催「『人文

- 学部の新しい可能性』人文学部開設 20 周年記念シンポジウム」(於：札幌・北海学園大学)
13. 「異文化同士の情緒・感情・感性がいかに内面化してきたか——「海」にまつわる感性・情緒の受容と変容」(単) 2013 年 7 月 5 日. 札幌大学・孔子学院「異文化講演」(於：札幌・札幌市エルプラザ)
  14. 「サイチング初期文学の再発見」(単) 2014 年 11 月 26 日. 日本モンゴル文学会「秋季大会・サイチング及び中華民国時代のモンゴル文学——ナ・サインチョクト生誕 100 周年記念シンポジウム」(於：東京・本郷東外大サテライト)
  15. 「詩的狂気の想像力と海の系譜——西洋から東洋へ、その伝播、受容と変容」(単) 2016 年 10 月 23 日 北海学園大学人文学部「第 11 回人文学の挑戦」(於：札幌・紀伊國屋書店札幌本店)
  16. 「近代モンゴル文学における日本」(主催担当) 2017 年 6 月 24 日. 日本モンゴル文学会春季大会 (於：北海学園大学)
  17. 「サイチングにおける日本の知の背景とその意味について——インド詩人ラビンドラナート・タゴール」(単) 2018 年 6 月 9 日. 日本モンゴル文学会春季大会 (東京・本郷東外大サテライト)
  18. 「詩学における再認識——非アリストテレス詩学とモンゴル文学」(単) 2019 年 9 月 15 日. 内モンゴル大学モンゴル学院「講演」(於：中国フフホト市・内モンゴル大学)
  19. 「修辞学在東方的盛衰变迁」(単) 2019 年 9 月 18 日. 中国内モンゴル自治区内モンゴル師範大学「講演」(於：中国フフホト市・内モンゴル師範大学)
  20. 「文学研究はいかに既存の「詩学」理論の「呪縛」から自由になれるか」(単) 2022 年 6 月 12 日. 日本モンゴル文学会春季大会 (於：東京・東外大本郷サテライト)
  21. “The beginning and the Spreading of the Imagination in Literature and Art” (文学と芸術における想像力の起源と伝播)」(単) 2024 年 8 月 26 日. International University of China and Mongolia. (蒙中

国際聯合大学)「2024 年度第 11 回教養講座」(於：モンゴル国・ウランバートル)

## 12. 主な研究報告

- 01 「怨親平等と戦争とモンゴル ― 元兵怨霊追善供養碑をめぐって ―」(単)『東北仏教の社会的機能と複合的性格に関する調査研究』(研究代表者大濱徹也)分担者, 平成 13～16 年度科学研究補助金〈基盤研究 A〉研究成果報告書〈論文篇〉) 2005 年 6 月, 55～79 頁
- 02 「人文学教育における文学の意味について」(単)『新人文主義の位相 ― 基礎的課題』(平成 22・23 年度北海学園大学学術研究助成共同研究報告書) 2012 年 3 月, 81-120 頁
- 03 「サイチンガ文学の再発見とその文学の源泉 ― 初期日本留学中の作品における啓蒙主義とロマン主義及びモンゴル文学の伝統文学」(単)『人文学の新しい可能性』(平成 25・26 年度北海学園大学学術研究助成報告書), 2015 年 3 月, 53-83 頁
- 04 「近代並びにグローバルな時代における文学の変化と応答」(単)『人文論集』第 57 号(「人文学の新しい可能性」北海学園大学人文学部開設 20 周年記念シンポジウム) 2014 年 8 月, 158-168 頁

## 13. 科研費・研究助成

1. 科学研究費補助金(萌芽的研究), 2000-2001 年, 研究代表者「中国・台湾における三島由紀夫文学の受容―翻訳・紹介・批評・研究事情・文献資料収集・調査・比較研究」
2. 科学研究費補助金・基盤研究(A) 2001-2004 年, (研究代表者池田俊英) 研究分担者「東北仏教の社会的機能と複合的性格に関する調査研究」
3. 科学研究費補助金・基盤研究(A) 2010-2013 年, (研究代表者稲賀繁美) 研究分担者「〈東洋〉的価値観の許容臨界 ― 〈異質〉な思想・芸術造形の国際的受容と拒絶」

4. 科学研究費補助金・基盤研究（A）2013-2015 年.（研究代表者稲賀 繁美）研究分担者「海賊史観からみた世界史の再構築」
5. 基幹研究助成（国際日本文化研究センター）2016-2018 年（研究代表者稲賀繁美）研究分担者「多文化間交渉における『あいだ』の研究」
6. 北海学園大学学術研究助成 2010-2012（船岡誠代表）研究分担者「新人文主義の位相——基礎的課題」
7. 北海学園大学学術研究助成 2013-2015 年（安酸敏真代表）研究分担者「人文学の新しい可能性」
8. 北海学園大学学術研究助成 2015-2017 年研究代表者「東西における人文科学の概念の受容と変容」
9. 北海学園大学出版部・学術図書刊行助成 2022 年度 研究代表者「学術研究書執筆刊行」

#### 14. 雑録, その他

1. 「日本について考えたこと——〈ワ〉の国・日本」（単）1988 年 3 月. 大正大学出版部『大正大学学報』第 64 号. 61-66 頁
2. 「内モンゴル・日本文学・中国」（単）1988 年 7 月. 昭和文学会『昭和文学研究』第 17 号. 96-97 頁
3. 「日本における大衆文化の一角にふれて」（単）1989 年 12 月. 財団法人・和敬塾『和敬』第 39 号. 74-76 頁
4. 『老鬼——わが青春の文化大革命』（原題『血色黄昏』馬波著（中国現代作家）, 和田武司監訳）集英社（共訳）1996 年 12 月（上巻）（翻訳分担：第 16～17 章（71-91 頁）,（下巻）第 34～35 章（31-52 頁）, 第 43 章（46-58 頁） ISBN：4087811336
5. 「固定観念を超えて——自己紹介に代えて」（単）1999 年 9 月. 北海学園大学人文学部『人文フォーラム』第 11 号. 12-13 頁
6. 「オリエントの自己批判の勃興？」（単）2000 年 8 月 北海学園大学人文学部『人文フォーラム』第 13 号. 9-10 頁
7. 「草原の発展の行方——2001 年度 HINAS 夏季国際セミナーと現地

- 調査に参加して考えたこと」(単) 2002 年 3 月 北海学園大学人文学部『人文フォーラム』第 16 号, 7-8 頁
8. 「単一性と多様性 ― イデオロギー的モニュメントの指向性・志向性を巡って」(単) 2002 年 8 月 北海学園大学人文学部『人文フォーラム』第 17 号, 4-5 頁
9. 「2 年周期の「進化」と『年報・新人文学』の誕生」(単) 2005 年 8 月 北海学園大学人文学部『人文フォーラム』第 23 号, 14 頁
10. 「ケンブリッジ大学の教育 ― 所感」(単) 2007 年 3 月 北海学園大学人文学部『人文フォーラム』第 26 号, 2-3 頁
11. 「ケンブリッジ大学のパルテノン神殿」(在外研修を終えて)(単) 2012 年 3 月 北海学園大学人文学部『人文フォーラム』第 36 号, 14-15 頁
12. 「世界の変化と文学の応答 ― 人文学部開設 20 周年記念シンポジウム」(単) 2013 年 9 月 1 日, 『北海学園大学学報』第 95 号, 2 頁
13. 「文学・文化における複眼的な思考」(シリーズ学問は楽しい)(単) 2014 年 5 月 北海学園大学『大学案内 2015』, 86 頁
14. 「詩的狂気と海の文学への探究(自著を語る)」(単) 2018 年 3 月 15 日, 『北海学園大学学報』第 113 号, 5 頁
15. 「人文学における「批判的思考」と「創造性」について」(単) 2023 年 12 月 北海学園大学大学院文学研究科『年報・新人文学』第 20 号, 2-11 頁
16. 「送る言葉」(大谷通順先生の退職にあたって)(単) 2024『人文論集』第 76 号, 23-25 頁